

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年
5月号
通巻549号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年5月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



大倭会館前の「奈良八重桜」 奈良市 井手泉さん撮影(文・5頁)

再録 昭和41(1966)年4月23日発行『すさのお』第5号より

「偉い」と「あかん」

法主 矢追日聖 (満54歳)

法主寸言

神ながらの教えは、信じている人にだけあるものではありません。人が信じようと信じまいと、この地球を含む大宇宙そのものが動いている中にも、神ながらの法による一つのものがあるのです。

信者が教祖を助けている

どこの宗教を見ても、教える者と教えられる者、つまり教師と信者という関係があります。大きく見ると教主と教団、わかりやすく言うならば、釈尊と仏教各宗という風に、そして、救う側と救われる側ができます。

こういうようなありきたりなことには、取り上げて考え直そうとする人はごく稀であると思います。これだよいかでしょうか。

私は、あなた達が既に御存知のように、「神ながら」を宗教として今日まで生かされてきたのですが、こうした立場から私は双方が平等に見えるのです。平等といっても、それは向かい合わせて並べてみて平等だということではありません。両者一つにして始めて、この両者は生きることになるのですから、切り離してそのいずれか一方だけを見ることは不平等で片手落ちの思いがします。

前の号で、「一寸「救い」ということに触れたことをおぼえているでしょう。い

ずれの宗教にあってもこの言葉はよく使われています。

「救い」とは何でしょう。液体など両手で汲み取ったり、さらったりすることを「すくう」(救う・掬う・抄う)といいますね。方言では「すくう」ともいっています。

人々が、苦しみ、迷い、悩みといったものを誰かに掬い取ってもらうような場合に、救いを求めるとか、救われたとか、助けてやるとか、助けられたとか、こういうような言葉が使われているのです。

救う者と救われる者を切り離して見る人々は、必ず救う者を高く偉い人のように価値づけたり、そのかわり救われる者を低く「あかん者」と見る習性があるように思うんですが、あなたははどうでしょうか。

何が偉い人か

広い世間に、ほんとに、偉い人、あかん人がいるのでしょうかね。私は知りません。人間各自がもっている個人差を挙げて決めるのであるならば、その特技や能力を示さなければなりません。だがこうした範囲においては人間の本質的価値は決められるものではありません。

平たく世間を見渡すと、大会社あたりの社長や重役さん、つまり沢山な財産をもっている者、有名になっている学者達、国会議員や大臣達、スポーツ・芸能界にある現在の英雄達、宗教団体の最高位の人々や教祖級の人達、こういうところを指して人々は偉いさんとして扱っているように思われます。

ここで、世間という教祖と信者にピントを合わせて、神ながらの鏡にうつして見ることに致します。

しょう。

教祖と信者、説明するには実に面白い取り合わせです。教祖は神の代行者で、超人間的な絶対者であると決めつけて信仰の対象にもってゆく。信者から見た場合ですが、そこでこの超人間的な大聖者、大偉人にすがって、自分の苦悩を助けてもらうために人々は集まる。これが信者であり、その数が増すにつれて団体と変わってゆきます。団体が大きくなればなるほど、教祖さんは、神輿の上から御簾の中へ鎮座ましまし、更に雲の上まで登ってゆきます。

このように高くはなれてゆく教祖さんに、信者達は益々有難たがって信仰を続けるようになりま。す。「うちの教祖さんは生き神さんや、何百万の信者ができたし、億万円の御堂が建った。偉い神さんや」といった喜びの言葉が信者から世間へ流されてゆく。お芽出たい信者さん達です。

相互扶助という神意

優越感や劣等感、つまり、人よりも「偉い」と思う心や、何をして人も人よりも「あかん」と思うような心は、もともと人間を生み成した神さんは与えていないのですから、そんな心をもつことは神慮に反逆することになるのです。神の心に反逆するような心をもっていて、どうして私達は幸福になれるでしょう。世界の平和など凡そ縁の遠い話です。

今、私が奈良の片隅で世界平和を叫んだところで、世界の何十億という人々の耳へどうして伝わるでしょうか。こんな誇大妄想の夢じゃなくて、せめてこの『すさのお』紙を読んで下さる、選ばれたあなた達と共々にね、神の心に添い奉る自分をつくってゆくように努めましょう。先ず「偉い、

あかん」という想念を私達の心から追い出すことに精進しましょう。

神は、人の上に人を造らず、人の下に人を造らず。名言ですね。神ながらの社会はこうあるべきだし、この波紋の広がりがやがて社会の平和に結びつくものと思います。

若しあなたが、こうした心の持ち主になるならば、あなたは大勢の人々を救っていますし、あなた以外にも、そうした人ができてくれば、あなたはその人によって救われています。

神はこの世を相互扶助に組み立てて下さいました。孤立した存在はありません。持ちつ持たれつ、どちらも平等です。この持ちつ持たれつということとは、女と男のように、神はその人なりに個人差をつけておかれたから調和が保てることになるのです。

私は人を救ったことがあります。これは先天的にもつ私の分です。私に救われた人がおります。救われるべき宿縁があったからでしょう。私も、この人も、同じように食事をするし、トイレに行く人間です。救われる人がこの世にいなければ、救うべき私の分が生かされません。私が救われています。互いにもつ喜びは平等といえるのです。人は互いに尊敬し合い、すべてのものに感謝して暮らすことは忘れてはならない大切なものです。

(昭和四一・五・一五 日聖記)

次頁の「大倭千一夜」のこと

大倭印刷所がスタートし紫陽花邑内での印刷が可能になり、タブロイド版『大倭新聞』を『大倭』と改題、A5版の雑誌になりました。新聞の時より一回分が長くなっています。(編集部)

大倭千一夜

(其の二十六)

昭和42(1967)年8月23日発行『大倭』8月号通巻第26号より再録

お化けと幽霊はちがう(上) 法主 矢追 日聖(満55歳)

——徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

化かすといふこと

今月はお盆月だから、そんな話はよう出ますね。私にどうだと聞かれるのなら、「あります」と答えますよ。あなたの言われる「お化け」や「幽霊」なんていうものは、取り上げてどうこういう程のものではありませんがね。

「お化け」ですか、これは幽霊とは一寸根本的に違っていると思いますよ。「化かす」ということですからね。人間が人間を化かす場合が一番多いと思いますが、普通にいう「お化け」は一つ目小僧が夜道で現われたといった種類だと思います。事実あることですよ。

話は変わりますが、催眠術にかかっていたら、冷たいものに触れさせて、熱いと暗示すれば熱がるでしょう。これも人が人を化かしていることになりませぬ。

狐や狸、またよくいうムジナやイズナといった霊力を強く放つ動物は、時々人間を催眠状態のような中間意識にしておいて、その状態の時、天に聳ゆるような高坊主や、赤い大きなトマトのような顔で白い歯を出してケタケタと笑う姿を見せたりするものですね。催眠術をかけるにも、その状態に引き入れるまでやはり準備演技があるように、この種の動物達が、もし、人間をからかかっておどしてやろうとか、夜道を歩いている人が——昼でも同じですが——持っている魚でも取りた

いと思えば、そうした念を含めた霊力を尻尾の先から放射してその人に向けるわけですね。こんな目にあつた人が、化かされたの、ヤレだまされたのと語るわけですね。催眠術なんか絶対かからん人や、動物の霊力をはね返すような力のある人は生涯経験することはないでしょう。

この辺でいう「イズナ」は、小型で人にもなつく狸のような動物ですが、こいつは強烈な霊力をもっています。易者なんか懐中にも入れておけば、客の心を伝えてくるので大変な儲けになるでしょう。また物体をあちこち動かしたりして人を驚かすのが上手ですから、利用の仕方によっては貴重なものとなるでしょう。但し、これは人間を化かそうと思うような低い人にとつての話ですよ。恐らく屋内であれば姿は見えないでしょう。

狐狸などに化かされたという実例はかなりありますが、まあこんな話をしだすと、きりがありませんがね。

変わった話といえは、これも大分昔のことですが、心臓が止まって幾日にもなるのに葬式ができないので困っているから、何とかしてほしいと頼まれたことがありますよ。私が見ると、狸霊がその死体の中へ入り込んでいたのです。誰かが側へ行くと、死んだ人の体や手が動き出すのでどうにもならない。体は腐ってひどい悪臭を放つ。これには家の人達も参たらしい。狸を抜いてやっただので、葬ることができたわけですがね。

思いを残すと……

幽霊のことでしょう、あなた方の聞きたいというのは。この世で誰かに怨恨を残して死んだ、所謂うらめしや……といった方でしょう。こんなのは正常な霊人とはいえないんですよ。つまり幽霊といえはね、死んでからその人が行かねばならない霊界にも行けないで、その人の魂(思い)だけが現世に留まって邪霊化し、現界と霊界の中間のような幽界でフラフラしている浮浪的霊人といったところでしょう。私はね、浄化し鎮魂している多くの霊人達と仲間になってきましたが、幽霊に出会ったことは殆どありません。

こちらから引き寄せて会った幽霊は数知れませぬね。大抵は死んだ時の状態の姿が多いです。溺死した人は水の中から、お産で死んだ者は血を分けて出てくるのです。これはこちらから求めて見たもので、幽霊になって死者の意志で出てきたものでありませんよ。

ただ一度、こんなことがありました。たしか昭和四年の夏だったと記憶していますが、妹はまだ女学校に通っていた時でした。その親友が長患いの末、とうとう死んだのです。妹の頼みで、私はひそかに念じてあげたのですが、その夜半より起こされたのでハッと目をさますと、私が寝ている蚊帳の中で、黒ずんだ垂れ髪の女性が私の足許に立っていたのです。正面と正面が向かいあつたわけです。これは幽霊でした。よく見れば、骸骨にバツサラ髪を垂らし、その中に黒い丸いタドンを二つつけたような眼、歯は白く突き出して、両手は両脇に力なく垂れ、薄い黒ずんだ着物をきていて、それが丁度紐で吊るした人形のような立ち方であつたのです。普通の者なら腰を抜かす所です

よう。暫くながめっていると、着物を通して胸が見えてきた。両肺の部分が真っ黒になっていた。お札に來たと直感したので、合掌すると静かに消え去ったのです。妹に聞けば、この友人は肺結核で長の患いのため骨と皮になって亡くなったとのことでした。後にも先にも幽霊を見たといえはこれだけです。

だから幽霊なんてものは、案外客観的な対象ではないので、出るとすれば、その幽霊と何か特別

大倭千一夜

(其の二十七)

昭和42(1967)年9月23日発行『大倭』9月号通巻第27号より再録

お化けと幽霊はちがう

(下)

法主 矢追 日聖 (満55歳)

——徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

幽体のあいさつ

幽霊というと、先程話したような「うらめしや」を連想しますから、ここではそれを心霊とか靈魂とかいう言葉に替えましょう。私は、完全に靈界で暮らしその人なりに精進に励んでいるものを「靈人」ということにします。

死んだ肉体、つまりもとの靈魂の棲み家だった肉体が使いものにならなくなったからといって、即座にその靈魂は、その肉体や境界からぶつりと縁が切れたものではありません。息が止まってからでも、肉体を構成している幾億の細胞が一個残らず完全に宇宙の生命力の作用ができなくなっ

な因果関係をもつ人との間に現われるような場合が多いのではないかと思います。それもある一定の期間で、幽霊として出なければならぬその思いが満足し、その目的さえ果たしてしまえば恐らく出る必要もなければ出なくなるものです。

毎日のように幽霊が出ると騒いで人々が見物に出かけるという種類は、何かの錯覚から生まれた化物でしょう。行った人達は上手に化かされたということですね。 昭四二・八・一六 日聖記

示しているといえますね。

心霊は人間の実体であって、肉体はそれが宿る入れ物ですから、心霊と肉体は物と器のような関係といえますね。入れ物がなくなっても(死亡しても)それに宿っていた心霊は、当分肉体をもっていた時の心霊と同じ状態で、働きをなさない肉体と関連性をもちつつ現界にて暮らししているのです。こんな期間は特にその人が生きていた時と同じように、家族や親族、交友関係の人々と強い結びつきをもっているのです。人々は、告別式が済めば、もうあの人はこの世に縁のない人といって別れを惜しみ涙を流すのですが、この時の死んだ人の靈魂は、まだ生きている人々と同じ状態にあるのですよ。

さあ、そこでだ。この人が生きていた時に、あれも思っていた、これも思っていたと、つまりこの世に思い残すことが多かったとすれば、それを果たすため多種多様な靈的現象が、特別な関係を

もつ人との間に出てくることになるんですね。生前のように肉体を使えるのなら靈的現象ではなく、人間と人間によって行われる日常生活の事象に過ぎないのですがね。

どんな時に?といわれてもね……。どんな場合もあるんですよ。戦時中によく聞いた話ですがね。野戦にいる筈の息子が夜半軍服姿で門口に立っていたとか、またかつての伊勢灣台風のあと、通りすがりのトラックを止めて乗るといふ女性が、トンネルを抜けるとその姿が消えてしまうといったもの、こんな例はさもあることと思います。両者の場合、肉体の機能が全く駄目になった時に、何かの強い念願をその瞬間に抱いたに違いないのですが、その思いが各様に見られる現わし方をするのです。肉体が物の用にたたくなくなった人の意志の伝達方法でもいっておきましょうかね。

思いは伝わる

この種の意思の伝達方法にもいろいろありましてね。昭和二十九年三月十五日でした。門人の青山日元は、西隣の芦池、つまり今の奈良国際ゴルフクラブのキャディ寮の西で掘立小屋を建てて住まっていたのですが、長女の八重須(五歳)が急に発熱したので、早速かけつけて見ると急性の肺炎になっているし脳膜炎を引き起こしていたので、応急の処置や手配を済ましてから小雨の降る夕暮時、鈴月と(旧)拜殿へ戻ったのです。話しているところへ沢口志など貝阿彌政代の二人が心配顔で入って来た。暫く話しているとき急に冷気がただよい、柱と嵌板の隅にもたせかけ斜めに立ててあった雨傘が、急に足から滑らないで上の方から板間へ叩きつけるように倒れたんですね。濡れている雨傘ですから異様な不気味な音を立てたん

です。女達の悲鳴に私は驚いた。志なは一尺程坐ったまま体を飛び上がりさせて驚いたような始末でした。耳をすますと、走ってくる下駄の音がコツコツとかすかに近づいてくるんですね。息を切らして日元は、幼女の死亡を伝えに来たのです。

それとまた想い出しますね。昭和四十年九月二十一日の夜更けのことでした。正確にいえば二十二日の午前二時五十分です。私は瑞光院の茶の間で宵の口から鈴月と家麻呂、房子、梢義、則之、順一と大倭の宗教に関して話し合っている最中のことでした。西勝手口へ近づいてくる下駄の音がする、一方開きのドアの外から低い声が出て、栓を開ける音がたしかに聞こえた。鈴月が返事をし「日紡さんや」(金泉利明、41歳、もと門人、入院中)という。入って来ない。慌てて家麻呂は窓を開けて外を見る。梢義は反射的に勝手口から飛び出してあたりを見て廻ったが静まり返って誰もきた形跡がない。これをきっかけに、日紡についての想い出話が始まると、再び同じ現象が繰り返して起こった。房子は蒼白になって言葉なく、順一は体の内部から急に冷えたという、私の腕をしかとつかみ頭をつけて激しく泣きじゃくり「日紡さんの話はやめて。話題を変えて!」と叫んだのです。若いから照れくさかったと思います。がね。なったのだから仕方ないことですよ。とうとう夜が明けたのですが、午前八時三十分死亡したとの電話を受けた房子が、足を浮かしてその知らせをもってきた。

あとで聞くところによると、丁度現象の起こった時刻に、日紡はベットから転落し血を吐き、それから昏睡状態になったということでした。こんな現象は死んだ人だけに起こるものではないのですよ。生きている人の心霊だつて起こることもあるのです。

よく幽体分離とかいって説明している人もいますが、生きている人間の心霊がもう一人の同じ人間の姿で現われるということ。その人はもちろん会話もするし、肉体をもつ人と同じ動きもするのです。心臓も動いているし、体温も感じさせるのです。実体と幽体の区別は難しいほどそっくりですね。このことは私自身が経験していませんから具体的に説明はできないのが残念です。しかし有り得ることですね。

生きている人の怨恨の心霊の働きによって、相手が病気になったり不幸になったという例はかなりもっているのですがね。これはよく言う「丑刻詣り」の呪いのような場合の現象です。いわば、生霊だの死霊だのと云って、要は自己本霊の作用ですから、肉体があってもなくても心霊から起こる現象は似たり寄ったりで、何も死んだ人だけに片寄ることもないのではないかと思うのですがね。

夢枕にたつ人

夢枕に立つということも古くからよく聞く話ですが、これは現在でも経験した人は世間によくあることと思います。浅い眠りの時に現われる現象のようです。夢のお告げというのもこの類ですね。

私はね、昨年十月十八日、有馬温泉の兵衛旧館で一泊したことがありました。部屋の側まで山が迫り、軽い細流の音が深い眠りにさそい込んでくれたのです。十九日の朝、「お茶はいかが」と声を掛けられたのでぼつと目をさました。気分は爽快でした。見ると茶人姿をした中年の男子が私の右肩の脇に坐り、左手は膝において、右手を伸ばし一服いれたお茶碗を枕許へ置いているところでした。もう何時かしらと時計を見ると五時三十

分でしたので、早朝からお気の毒に、有難いことだと、実は内心では旅館の誰かが特別サービスで茶人を差し向けてくれたのかしらと思いつつも、どうも腑に落ちない点があったのですが、とにかく起き上がろうとすると、寝巻の右袖が茶人の膝の上で押さえられていたため、二、三回起きようとした時に、はつきり目がさめました。

時計を見ると五時三十五分でしたから時計は正確に見ているのですが、枕許のお茶や茶人は消えていたのです。面白いこともありませぬ。朝の散歩に出かけると、旅館の廊下に茶会のポスターが貼られているのが飛び込むように目に映ってききましたよ。

表紙写真について

四月下旬、大倭会館の正面右に支え棒に頼って立っている一本の桜が花開きました。「奈良八重桜」と申します。千年前の歌人が「いにしへの奈良のみやこの八重さくらけふ九重にほひぬるかな」(伊勢大輔)と詠んだそうです。

この桜、正面から見ればそこそこ成長した木です。ところが裏に回ればあつと驚くほどの痛々しい姿をしています。こうなるまで気が付かなかった私達の責任です。今年咲かなければ大とんどで火にあげて次世代の桜を植えようかとの教長さんの話もありました。が……。(編集部 P)





馬

大阪府池田市 平谷照子



『古今著聞集』という本がある。その中に《阿波の国に知願上人といつて、国中の人が帰依する上人がおられた。乳母であった尼が死んだ後に、上人のもとに思いがけなく「駄」（主として荷を負わず馬）が一足用意された。是に乗って行くと道は早く行けるし、悪路も河を渡る時も危ないことなく、急ぐときはムチをうたずとも早く行き、急がぬときは静かに行く。ことごとくにありがたく思っているのに、この馬は間もなく死んでしまった。

上人が馬の死をおしみ嘆いているところに、死んだ馬と少しも違わない馬がきたので、上人は喜んで先のように深く考えることもなく乗り歩いていったが、或る尼に霊がついて怪しく思われたので、「あなたは誰か。何を告げたいのか」と問いかけると、「私は上人の乳母の尼でございます。上人の御事をあまりに大切に思っておりますので、馬となつて長く上人をお乗せしてお仕えしました。その後この世を去りましたが、なおも上人を忘れることができません、又同じ馬となつてもここに仕えております」と言う。

上人はこれを聞かれて思いあたることが多く、あわれに思われて堂を建て仏を作り供養して、菩提をとむらわれた。そして馬を大層いたわつておられた。

執心の深さにより、再び馬に生まれて上人に仕

えるという志をあらわしたことは大層あわれである。この話は建長（1249〜1255年）の頃のことである。今の事である。』

『古今著聞集』橘成季により1254年成立）読み終わって思い出したことは、さる高級霊の御用を務めるといふ霊魂が、霊媒を通じて、「高いところにいられる方のところは、われわれが近づけるところではない。しかし、お呼びがあればサツとゆける。お指図をうけて仕事をすべし」と語ってくれたのを聞いたこと。

知願上人と「馬」になつた乳母の間柄も、上人が霊界におられる時から御用掛を務めていた霊魂で、上人がこの世に出来る時、共にこの世に出されて乳母として仕え、その生を終えると今度は「馬」として上人の外出を助ける。献身である。

それはそれとして、私は「馬」の夢をみた。その馬は六世紀に厩戸皇子の馬として活躍したが、今、人として世に貢献しているという。皇子とは深い因縁で結ばれた靈魂なのだろうか。

また「馬」について語ると、思い出す方がいられる。三十年ほど昔になるが、東大阪市にある「瓢箪山稻荷神社」に参詣したことがあった。解散後、「往生院」をたずねてみませんか——というところで、数人で寒い道を歩いて往生院へ。

ひとりが大倭からまいりましたと名告ると、通されたのは大きい囲炉裏のある部屋。炉にすえられた重厚な茶釜を見ていると心がゆつたりしてくる。茶を頂きながら、何故、こちらに「楠木正行」の墓があるのでしょうかと尋ねた。

住職が言われるのには、庫裏の片隅で坐っている後姿の人影を見まして、「どなた？」と尋ねましたらナ、「楠木正行」と名告りましてナ、「死ん

だ場所はここだ……」と告げられたので、墓を建立し回向をしております、とのこと。住職は霊感をおもちのようで、相談客も多いようである。

炉を囲んでポツリポツリと話される住職がうつむいて何やら考えごとをしておられるようであったが、思いがけないことを言われた。「馬が人間として出ているとは聞いてはいたのですが……」。そして「それが、今日、よくわかりました」という。

それだけの言葉だったが、住職は、私の夢に出た「馬」と同じ馬のことを教えられておられたのだと思つた。……

同席の方たちは、何のことやらという顔をされて坐つておられた。当然である。

住職は、「矢追日聖さんのことは、前々から存じあげておりましたが、一度、お目にかかりたいと思ひまして大倭へまいりましたが、ご不在でお会いできませんでした」とも。

お名前も存じあげない方であるが、今も思い出す方である。

2016・1・18

私の「法主寸言」

あじさい色 中島 健

▼神さんは自然神と人格神がある。自然神は万物一切生みなすエネルギーで加美（神さん）と言う。神社仏閣に祀る神さんは人格神である。

日本語での「かみさん」は上下のかみさん。お上、女性のおかみさんと目上に対して言うことから、自然神も人格神も「かみさん」である。

(自分の言葉でまとめて)

私はこれを区別して見ることが法主さんの言われる、神さんの区別をすることが大切なことだと受け取り、自分の立つ位置が見えたように思う。

寸 紗

第119回

菅野 弘子さん



歌が恨を解く時

「人生悔いなく歩いた。今はお父さんと桜見ながら散歩できるのが一番。仕事仕事で年に1度休むだけ。こういう時間もあるとはなあと言うた。2人で旅行も行った事ないし歩くなんで考えた事なかった」

昭和42年より大倭邑人となり、長曾根寮、菅原園に介護の仕事で32年間勤務。昨年末退職した菅野弘子さんの人生を追う。(名字の菅野は地名から採り、法主さんによって命名) 昭和14年5月、大阪市城東区中浜町。在日朝鮮人2世として3世帯が同居する家庭に(兄2人)生まれた。2歳の時に母方の祖母が帰幽し母親の梁成生さんに連れられ韓国済州島で5歳まで喪に服した。日本に帰ると父親は他に家庭を作り出してしまっていたので18歳まで父親の顔を知らなかつたという。

弘子さんは戦後にできた朝鮮学校の1期生だがGHQと日本政府の方針により閉校に追い込まれ4年生で日本の小学校に編入する事になる。

授業が始まるまでに、「朝一で奈良や三重へ買出しに出かけた。学校の前を通って帰ってくるんやけど恐いとも恥ずかしいとも思わなかった。生きるという事しかなかった。アルバイトも笛を作ったり岩籾(いわがら)をセロハンで包んだりと何でもやった。中学を中退し洋服屋でズボンを、16歳からは上着屋で仕立ての職についた。「晩の12時まで働いて帰ってきたら、いつもお母さんが外で待っていた。湯たんぼ沸かして布団に入れてくれた。お母さんがおるからやってこれた」。稼いだ中から結核に悩んだ父親に毎月3千円送り、法事の供物も届けた。お母さんはいじめられても逆らわず姑の面倒を看、夫と姑亡き後も2つの御膳を毎日供え

た。「お母さんの生き方を見てたら私はどんな事があっても平気」

30年代は青年会も活気があり休日には鶴橋の朝鮮人会館に集った。弘子さんは映画や歌声喫茶でシャンソンを歌うのが好きだった。服はあつらえ物でおしゃれもしたという。

23歳の時、いとこの家で後に夫となる金(菅野)昇允さんと一緒に働く事になる。「息が合った」

昭和38年8月15日大阪扇町。解放記念日の集會に宇宙飛行士ガガーリンも来るといので、初めて昇允さんと出かけたのがきっかけで40年に結婚。41年に長女が誕生した。

ある日の朝、刑事によって昇允さんが3日間拘留される。韓国のキリスト教クエーカー派の思想家・咸錫憲(ハム・ソクヘン)氏の影響を受け徴兵を拒否。国交回復前、日本に密航してきたのが当局に知れたのだ。日本のクエーカーの集會で出會ったFIWCの今村忠生さんの甚大な協力を得て、弘子さんは長女をおぶって法務省で40日間座り込みの嘆願運動をし、1年間の特別在留許可が下りた。「自分の親の事があるから、子供は何としても2人の手で育てたかった」

今村さんは法主さんに相談し、柴地則之さん山上憲一さんが訪ねてきて下さった。柴地さんは、「大倭にきて生活しましょう。そうじゃないと支援するにしても情がわかない」

1年後、昇允さんは自費出国を余儀なくされ帰国。弘子さんは邑人となり5日後に長男を出産。法主さんは日本側の保証人として鈴木母さん柴地さん今井富蔵さんと何度も法務省に出向いて下さり、杉山龍丸さん筑紫哲也さんらの協力も得て、1年10カ月後、45年の大晦日に妻子の招請によって奇跡的に正式に日本に入国。韓国でも朴正熙大統領時代、1日でも遅ければ出国不可能というぎりぎりのタイミングであった。

昇允さんは仕立ての仕事で、弘子さんは長曾根寮で介護職に就いた。晩くまで内職もし5人の子供を育てた。「目一杯働いてきて楽しかった。苦勞したという気もない。これも好きな歌があったからやらなあ。歌ってから仕事に出ると楽しく介護に入った」。60歳で本格的に歌のレッスンを受け奈良県民大会で特別賞を。奈良テレビで優勝した経験もある。

昨年やっと家のローンが終ったところで胃癌の手術。吐きながら働いたが漸く症状も落ち着いて。今度は昇允さんが肺癌に。昇允さんはこれで全財産だと手渡そうとしたが、弘子さんは、「お金なんかいらん。ただ、1日でも長く生きて」。これからは、「この人のやりたい事は何でもしてあげたい」。(聞き手 李章根)

あじさい日誌

4月11日 教務本庁で午後7時
から本紙編集会議。来年の記事
について話題に。法主様の録音
テープ等をお持ちの方がおられ
たらご一報下さい。

細報告は後日。昇ちゃんは「ア
メ、イカナイ」とまさかの欠席。
4月19日 大倭大宮拝殿にお
いて午後2時から、鈴月かあさ
んの帰幽15年祭。DVDや思い
出話で笑い声が多かったのも、
かあさんらしく……。

4月14日 熊本地方で大地震が
起こる。

4月23日 大倭大宮月次祭。
5月3〜5日 交流の家整備
ワークキャンプ。その前に熊本
にボランティアに行ってきたメ
ンバーもいました。

4月15日 大倭神宮で箭負祭。
4月16日 交流の家で午後、F
IWC定例委員会。2月5日か
ら10日間、フィリピンのハンセ
ン病隔離島であるクリオン島で
行われたワークキャンプ報告。

5月4日 昇ちゃんは青山法義
さんと映画「アラフォーマーズ」
に。元氣回復？

4月17日 大倭会文化行事で嵯
峨野方面へ。風雨が激しいとの
天気予報で参加者6人。持ち直
して散策日和となりました。詳

5月6日 大倭神宮月次祭。
夜、大倭会館で邑倭の会。

4月18日 大倭会文化行事で
入職員研修会。理事
長・管理職との茶話
会もありました。

5月8日 裸会。この日は藤本
宏秋さんのお知り合いの、真和
子(大阪府交野市)・武田菓子

5月10日 10時半よ
り茂毛路園あじさい
ホールで法人成立60
周年記念式典。永年
勤続表彰は20年3
名・10年7名、資格取
得者は3名。昼食は
各施設とも馳走で
お祝いしました。

5月10日 スカイジ
ユビター楽団の演奏
や職員の出し物を楽
しみながら家族交流
会が行われました。

第331回大倭会文化行事

吹田の万博公園に
国立民族学博物館を訪ねる

日にち 平成28年6月19日(日) 小雨決行
集合 大阪モノレール「万博記念公園駅」
改札口 10時30分

行き先 生活に密着した世界の民族の展示品
を見学して一日を過ごす。

交通 (奈良方面から) 近鉄学園前で神戸三
宮行き快速急行8時46分発⇒難波9時14
分着、地下鉄御堂筋線(北大阪急行)の
千里中央行きに乗換え9時29分発⇒9時
59分千里中央着、大阪モノレール10時
15分発門真行きに乗換え万博記念公園駅
10時21分着

問合せ 湯浅芳郎
携帯090-6987-5847

(大阪府松原市)・福田彩子
(大阪市)・文野晴美(東大阪
市)さんらが初めて参加されま
した。

5月10日 大倭安宿苑成立記念
日。式典に先立って安宿苑の守
護神である成謙坊大善神にご挨拶
しました。

軽費老人ホーム「大倭滝の峰
荘」は45周年の記念日。

大倭病院玄関ロビーにおいて
毎年恒例の「看護の日のイベン
ト」。骨密度・血管年齢・血圧・
体重・身長・握力測定の結果チ
ェックと健康相談が行われ、地
域の約100人の皆さんが来ら
れました。

大倭安宿苑では
4月18日 5名の新
入職員研修会。理事
長・管理職との茶話
会もありました。

5月10日 10時半よ
り茂毛路園あじさい
ホールで法人成立60
周年記念式典。永年
勤続表彰は20年3
名・10年7名、資格取
得者は3名。昼食は
各施設とも馳走で
お祝いしました。

5月10日 スカイジ
ユビター楽団の演奏
や職員の出し物を楽
しみながら家族交流
会が行われました。

4月23日 スカイジ
ユビター楽団の演奏
や職員の出し物を楽
しみながら家族交流
会が行われました。

(須加宮寮)
4月24日 障害者スポーツ大会
の卓球に3名が参加しました。

(長曾根寮)
4月18日(日) 7名のボラン
ティアさんでオカリナ演奏。

4月23日(特養) いつも来て下
さる5名のボランティアさんの
感謝会を開きました。

(茂毛路園)
4月17日 外の八重桜をながめ
がらのおやつタイム。

(八重垣園)
5月10日 60周年記念の食事
パーティーに今年は全員が参加
することができました。

昭和五十二年四月末、今から
四十年前のことです。我家の守
り神「神倭加茂津日女命」の御
霊鎮めを四月二十三日にして
いただきまして、法主様、鈴月か
あさま、柴地則之さんが美甘ま
です。お社と一緒に越し下さっ
たのです。その時、かあさんは、
お社を膝の上に大事にずーと抱
いて来て下さり、車を降りるな
り「重たかった」とおっしゃ
いました。不思議でした。霊魂
に重さがあるのか？

そう言えば、その二ヶ月前の
二月に母(田中一二三)と初め
て且田容子さんに大倭へ連れて
行ってもらい、瑞光院の坂をフ
ラフラしながら、やっつと登り、
法主様にお会いした時のこと。
命からがらにたどりついた母に

あんない

*月次祭(大倭神宮)
6月6日(月) 午後2時より大
倭神宮にて。

*大倭会主催第569回祝会
6月12日(日) 午後2時より大
倭大宮拝殿にて。6月は12月
とともに大祝ぎの月です。

*月次祭(大倭神宮)
6月15日(水) 午後2時より大
倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)
6月23日(木) 午後2時より大
倭大宮拝殿にて。

法主様が「後ろにきれいな着物
を着たお姫様が一緒に来ている
よ」とおっしゃいました。帰っ
てから母は体重が二キロ軽くな
ったと言いました。きれいな着
物、重さのある霊魂、裾を引き
ずる衣ずれの音、母にはすべて
納得のいくものでした。

「重かった」と言う言葉に
私は霊魂に対してとても親しみ
を感じました。色もある、音も
する、香りもある。ああこの世
と少しも変わらないんだと。

その日から家族が一人増え
て、お姫さんと呼んでいます。
宴会も踊りも琴も大好きでイ
ベント好き、おかげ様で母(八十
八歳)は心も体も元気です。イ
ベントには鈴月かあさんもお招
きし一緒に楽しんでいます。